

お正月を迎えて

皆様の「多幸をお祈り申し上げます。」

「もういくつ寝るとお正月・・・」と指折り数えたり、おせち料理を食べたり、お年玉をもらったりといった風習がきつとどなたにもあると思います。

元旦の朝を迎えると、周囲のすべてのものは、昨日となにも変わりがないのに、なんとなく新鮮な気分になるから不思議であります。

何千年ものあいだ、連綿とご先祖様より受け継がれてきた文化や伝統が身体の奥底にしみついているのではないのでしょうか。

年のうちに煤を払い、門松を立て、しめ縄を張られた元旦の朝を迎え、お雑煮を食べる。

そして改まった気持ちになり、「今年こそは悔いのない年でありませうに」「初心忘れべからず」と年の初めに引き締められた心を一年中忘れずに過ごしたいものです。



初夢について

元日の朝に見る初日の出といい、二日には書き初め、商売初めの初荷、初売りなどがあります。

元日の夜、つまり二日の明け方に見る夢を初夢といい、いかにも一年の初めを印象づけます。初夢という一般的なには、一富士、二鷹、三なすびが、縁起がいいと昔から伝えられています。

さらに元日の夜にはお宝売りというものが居て、お宝、お宝、お宝・・・と叫びながら宝船に七福神が乗っている絵に「なか(長)きよ(夜)のお(十)のねふ(眼)りのみなめさめ(見目覚)なみ(波)のり(法)ふね(舟)のおと(音)のよ(良)きかな」という和歌を書いた半紙を売り歩いたことを聞いたことがあります。



煩惱の数は百八ある

私たち人間には、眼と耳と鼻と舌と身と意の六根という感覚器官を持っていますと般若心経にのっています。よく修行者が六根清浄といながら、山道を歩いているのを、テレビなどで見たことがありますか。この六根が煩惱の根源なのです。好き、ふつう、きらいの三つの状態があつて、六根に三をかけて、十八となり、十八の煩惱に浄と不浄の二をかけて三十六です。それをさらに過去、現在、未来の三世をかけて百八となるのです。その煩惱は、泉のごとくどんな沸いてきて、これが娑婆世界であり、私たちを苦しめるのです。それ故、毎年、大晦日の夜、除夜の鐘をついて、煩惱を除くのです。ゴーンと遠くこだましていくように、身体から煩惱を遠く運んでいってほしいものです。

三車火宅の譬え

法華経に説かれている譬え話し

インドのある国のある町に、大きな長者がいました。その家は広大なものでした。門は、ごく狭いのが一つあるだけです。しかも、家は大変荒れはてていました。ある日、その家が突然火事になりました。家の中には、長者

の子ども達が火勢で大勢いて、夢中で遊んでいて、火事に全く気づきません。長者は、大声で知らせますが、子どもには届きません。その時、長者は、ふと子ども達が車を欲しがっていたのを思い出しました。そして、火事のことではなく、次のように呼びかけたのです：『おまえ達の好きな、羊のひく車、鹿のひく車、牛のひく車が、一門の外にくるぞ。』「買ってあげるから早く出てきなさい！」、すると子ども達は、その言葉を聞いて正気にもどり、われ先にと燃えさかる家から出てきて助かりました。長者が、子ども達が助かって安心していると、子ども達は、口々に約束の車をせがみます。すると、長者は、子ども達が欲しがっていた車ではなく、大きな白牛のひく大変豪華な車(大白牛車)をみんなに与えました：。長者、子ども達の父は、お釈迦さまです。子供達は、凡人です。



荒れはてた家とは、現実の人間社会です。火事は、われわれの煩惱を指しています。私たちは凡人は、物質、肉体などにとらわれて、なかなか苦しみからのがれることができないことが説いています。

念仏講の新年会のお知らせ

毎年の恒例の念仏講の新年会を下記の通り開催いたしますのでどうぞ参加下さい。

記
日時 平成31年1月28日(月)
午前11時より
場所 玉泉寺

※ 申し込みは、1月20日(日)までに玉泉寺32-0791連絡ください。

合掌のある暮らし

手と手を合わす習慣は、幸せ作りなのです。おじいさん、おばあさんが、朝な夕なに手を合わせている姿を見て、子や孫が真似をする。すると自然に仏様を敬う習慣が身につく。これが受け継ぐ佛教信徒です。ところが、核家族という単語あるように、世帯が分離して生活するようになってきました。ゆとりがなくなり、共働きになり、貧困家庭が生まれて来る。お父さん、お母さんが、稼いでも、稼いでもゆとりある生活は程遠いです。そこには手を合わす習慣を身につけることができない。非常に悲しい世の中です。でも人と人が出会えるのはうれしいです。出会ったときに手と手を合わすことが出来れば、幸せが来るのではないのでしょうか。

びんずる会

座禅、写経、清掃などをして、心の修養をします。皆様のご参加をお待ちします。参加してみようと思われる方は、ご一報下さい。

川柳

正月 また年を取る 老いることかな

発行者 高島市安曇川町田中三四五九

天台真盛宗玉泉寺 木村哲基

電話 〇七四〇一三二一〇七九一

携帯 〇九〇三七〇八七二〇六

Fax 〇七五〇二二二七九

メール① Info@gyokusenji.com

メール② svka37375@leto.eonet.ne.jp

ホームページ

「天台真盛宗玉泉寺」と「滋賀高島石仏の玉泉寺」
どうぞご覧ください。